

DIABLO
疫禍を招く歯

短編小説　作：
Z BREWER

ストーリー
Z BREWER

編集
ERIC GERON

ロア・コンサルテーション
IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション
LEWIS HARRIS, VIVIANE KOSTY, JOE SHELY, DANIEL TANGUAY

制作
BRIANNE MESSINA

デザイン
COREY PETERSCHMIDT

イラスト
MACIEJ JANASZEK

© 2023 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、
米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

疫禍を招く歯



これは二人の伝説的人物の物語だ。一人は荒野に生まれ… もう一人は城塞都市に生まれた。

私、テジャルは今日にいたるまで私を苛む幻視の中で、両者の目撃者となった。さあ居住まいを正し、これより語る若きドルイドの少年… そして彼の将来にまつわる物語に耳を澄ませたまえ。

疫病が世界に闇を落とし、ついにはウェストマーチから遠くない小さな街に手を伸ばそうとしていた。人々は助けを求めるも、領主は耳をふさぐばかりで彼らの悲嘆は聞き入れられなかった。今日でも件の疫病の起源にまつわる噂が囁かれているが、そのような噂は炎を煽り、街を永遠に焦がすこととなる。

これは言葉で始まり、血で終わる物語…

「領主様」ホルプスは手を揉み合わせながら言った。「すでに食料が不足し始めています。そのような命令を出せば農民たちが反乱を起こすやもしれません。農民を粗末に扱えば、農地の作物が放棄され――」

領主が嘲って言った。「今度は汚らわしい下層の民の話を聞けと？」私は奴らの領主だ。貴様らの領主なのだぞ。私が命じるままに動けばいいのだ」

別の男、アルダンが咳払いすると、その音が部屋の壁に響いた。「も、申し訳ございません、閣下。ですが民は飢えております。どうかご再考を賜りたく――」

キレクは、嘆願が受け入れられないであろうことを悟った。対処すべきより差し迫った問題はほかにもあり、費やせる時間には限りがある。「閣下。ウェストマーチから至急の報です」領主に呼びかけながら、彼は右側で何かが動いているのに気付いた。石造りの壁の亀裂越しに、キレクは若いドルイドの姿を見た。ヴィルムという名の、領主が赤ん坊の頃に引き取った少年だ。キレクはいつもヴィルムに神経を尖らせていた。招かれざる客のように城のあちこちに出没する彼は、余計なものを見すぎる一方で他者と話そうとしなかった。彼は同年代の子供たちを避け、城に棲むネズミたちを友としていた。この時も、少年は魂を感じさせない目でキレクを見つめつつ、自身のチュニックのきめ細やかな布地をかじる肩の上のネズミに鼻を擦り寄せていた。

領主が尊大な調子で不満を口にした。「今度は何だ？また農民の反乱についての知らせか？」

「閣下。もっと深刻な問題です。疫病が急速に広まっております。通りでは数千人が死に瀕しているとの報告が入っています。皮膚にできた腫れ物が膿で裂けるとか。病は砦にまで広まっているようです」キレクは唾を飲み込んで肩越しに振り返り、ホールで特に目を引く衛兵に合図を出した。「閣下、疫病は我らの土地にすでに入り込んでいるようなのです」

手袋して口を布で覆った衛兵が何者かを部屋に引きずりだし、一同の前に放り投げると、不安によりキレクの鼓動が早くなった。領主の反応は予想しがたい。その目で証拠を見ない限り主が何も手を打たないであろうこ

「こぼした食事もあげられないなら、代わりにみんなを食べるかもね」

とは確かで、その証拠が今、咳をし、体を震わせながら主に跪いていた。

領主が顔をしかめて玉座に腰を下ろした。農民が咳をし、唇から唾を垂らした状態で痛みに呻いた。顔と腕は腫れ物に覆われ、そのうちのいくつかは破裂しており、元から汚れていた皮膚に脂ぎった光沢を持たせていた。

キレクは、先程より穏やかな口調で再度話しかけた。「薬師はネズミの大群が病を野火のように広げていると言っていますが、下々の者たちは呪いだと噂しています… ドルイドの呪いだと」

領主がかぶりを振った。「呪いではあろうが、ドルイドが原因なわけがない。ドルイドはこの砦にも、そなたらの君主にも友好的だ。非難を向ける相手に気をつけるのだな、キレク。それとも、我が息子がかつてはドルイドの一員だったことを忘れたのか？今こうして私に世継ぎがいるのは、ひとえにドルイドたちのおかげだ」

キレクは壁の向こうからこちらを見ている少年に意識を向けた。ヴィルムは自分の本当の親を知っていただろうか？知らなかったとしても、今ので間違いなく理解しただろう。徘徊と盗み聞きには似合いの報酬だ。

キレクはもう一度領主に呼びかけた。「閣下、ご子息はネズミを城内に呼び込み、飢えている民の腹を多少は満たせたであろう食料をやって肥え太らせていらっしゃいます」

「ネズミは滅多に飢えないんだ」口を開いたヴィルムが、はっきりと聞こえるだけの声の大きさで言った。「こぼした食事もあげられないなら、代わりにみんなを食べるかもね」彼が歪んだ歯でいっぱいの口に笑みを浮かべ、暗い瞳でキレクを見つめた。

キレクは、ヴィルムの突然の主張を無視して話を続けた。「ドルイドの呪いであろうとなかろうと、ご子息は疫病が広まる一因を作っています。薬師はネズミどもを煙であぶり出して焼き払うよう助言を――」

「口を慎め、キレク。さもなくば、その舌を切り取るよう命じること

になるぞ」領主の目の前のテーブルには彼の対処を待っている知らせが置かれていたが、領主の視線がキレクから知らせに戻るまでの逡巡はごく僅かだった。「二つの問題だが、一気に解決できるだろう。つまり、何もしなければいいのだ。下々の民は呪われたと信じるままに飢え、腐らせておけ。奴らが死ねば食料の節約になるし、疫病の勢いも弱まる。さあ、言った通りにするがいい」

キレクは助けを求めて同僚のホルプスとアルダンの方を見たが、彼らは表情を険しくするだけだった。主の言葉により、民を救う希望は潰えた。上機嫌に見えるのは領主とその息子だけで、後者は友としているネズミたちの安全が数日は確保されたことにご満悦の様子だった。

数か月が経った。

死と不幸の大波は「大いなる病」と呼ばれるようになっていた。ウェストマーチを席巻した悪疫は領主の命すら奪い、人口は瞬く間に半分以下になった。生き残った住民の要請により、キレクとホルプス、そしてアルダンは指導者としての重責を担うようになっていた。彼らは薬師の助言に従って下層階級の看護に乗り出し、街の壁の内側にある病に蝕まれた遺体の除去も行った。

キレクは新たな遺体を持ち上げて穀物袋のように肩に担ぐと、息を吸わないよう努力した。ここ最近は腐った肉と裂けた腫れ物の悪臭によるむかつきが取れず、街を救うのだと決意した一方で、死と腐敗の臭いはほとんど耐え難かった。葬儀は行わず、ただ野焼きにするだけ。例外はかつての主だけだった。領主は最後には喘ぎ、咳込みながら死んだ。ホルプスとアルダンが掘った穴に、キレクが亡骸を収めた。ドルイドだった息子も同じように埋めることになるはずだったが、あの少年は砦を抜け出しより安全な土地に逃げたか、城のどこかにある隙間で人知れず野垂れ死んだに違いなかった。（いなくなってくれて清々したよ）運んできた遺体を野焼き場に降ろし、また別の遺体を担ぎ上げながらキレクは思った。

キレクの肩から力なく垂れ下がる遺体を調べつつ、ホルプスが首を傾げた。「こいつ、本当に死んでいるのか？」

厚いかさぶたと緑色の膿に覆われたあばた顔を確かめようと、キレクは遺体を前に傾かせた。

視線が遺体の顔にさしかかると、キレクは唇を嫌悪に歪めた。「あいつだ。ドルイドの少年だよ。親が親なら子も子だな。死んでいても生きていても役立たずだ。火葬場に持っていこう」

ヴィルムの口角が引きつって以前と同じ鋭さの歯が見え、瀕死の状態だというのに笑みを形作った。

アルダンが息を呑んだ。「生きてるぞ！」

キレクには憐憫の情はまったく湧かなかった。「この少年はネズミどもを愛でていた。汚らわしいドルイドの血筋がそうさせたのだろうが、ネズミどもによって疫病の蔓延が一層早まったのは間違いない。こいつを死なせれば流行の終焉に繋がるだろう」そしてキレクは、疫病におかされているというのに妙に穏やかな様子のヴィルムに話しかけた。「まだお前の惨めな生にしがみつく気なのか？お前以外は皆うんざりしてるんだ」

キレクがそう言ってヴィルムのかさぶたに覆われ力の抜けた体を火葬場に降ろすと、少年は煙と燃え上がった火に喘ぎ、声にならぬ声を上げた。

去り際に三人から沸き起こった残忍な笑い声が、火が弾ける音に混ざった。キレクが最後に振り返ると、火に飲み込まれようとしているヴィルムの額に汗が浮かび、光っているのが見えた。火が迫っていく。

少年の肌が火に覆われ、汗が音を立てて蒸発し始めるまで待ち、彼はそこでようやく背を向けた。

数年が経った。

大いなる病はその間ずっと猛威を振るい続け、ようやく終息した時には、キレク、アルダン、そしてホルプスは気付けば見たこともないほどの富と権力を手にしていた。彼らの広大でのどかな荘園は美しく手入れが行き届き、下層民たちが疫病が蔓延していた頃の各々の尽力に報いようと熱心に働いてくれ、何もかもが上手くいっていた。三人を英雄として称えたのち、新たな領主は締めくくりとなる仕事、すなわち市中にいる害獣の一掃を命じた。疫病は終息したがネズミが残っており、穀物の蓄えを食い散

らかしている上に新たな病気をまき散らす危険もあった。さらにまずいことにネズミたちは妙に興奮した様子で、まるで待ち望んでいた何かが起きようとしているかのようだった。農民たちからは、夜中に大量のネズミが一塊になって路地を移動しているのを見かけるとの声も上がっていた…

「十分な時間をかけてあの忌々しい疫病を排除したと思ったのに、また下水に来て、どっちがネズミだかわからん有様でネズミ狩りをする羽目になるとはな」ネズミの痕跡を探し、キレクは暗いトンネルをたいまつで照らした。空いた手には捕まえた害獣が詰まった袋を持っていた。溺死させようとしているものの、連中は水面に浮かんでそれに抵抗している。アルダンもネズミが詰まった袋を携えていたが、その中にいる連中は薬師が調合した毒で仕留めてあった。下水の入り口に戻ったら、害獣たちは野焼きにくべることになるだろう。「それにしても、ホルプスの奴はどこをほっつき歩いてやがるんだ？仕事をさぼるなんてあいつらしくない」

「どうせ家で大酒を飲んでるんだろう。うらやましい話だ」アルダンが下水の汚らしい石壁に目を凝らしつつあたりを見回した。「ここは落ち着かない。どうもその… 俺たちの方が獲物になったような気分になる…」

キレクは頷いて同意を示した。足を踏み入れて以来、妙な感覚が続いていた。こちらからは見えないが、確かに圧迫感を感じる数千の目に見られている。「さっさとここを出てホルプスと一緒に酒盛りといこう。少しでも早くこの悪臭から離れたい」

だがホルプスの館に到着すると、正面扉がわずかに開いたままになっていた。家具はそこかしこに散乱し、ばらばらになり、そしておそらくは齧られている。暖炉には、今にも火が消えそうな柔らかい燃えかすでいっぱいだった。居間の高級カーペットには黒い泥の跡がついており、それをたどると寝室に入り、羽毛を使ったベッドへと続いていた。ベッドにはただひとつ、二人には見覚えがないし理解もできないルーンが刻まれたネズミの頭蓋骨だけが置かれていた。

疑問の余地はなかった。ホルプスはここにはいない。

そして下水にいる何かが彼をさらったのだ。

アルダンが乾杯のためジョッキを掲げ、ろれつの回らない舌で言った。「不在の友に」

二人が腰を落ち着けた酒場は無名だが、旨いエールと上等な料理を出し、何より重要なことに客の素性を詮索しなかった。女店員によってカウンターに置かれたばかりのジョッキからエールがこぼれたが、キレクもアルダンも気付かなかった。ホルプスに起きた出来事に関する議論が白熱し、実のところ、どちらもこれが六杯目だったが、どれだけのエールを飲んでも見たものを記憶から消すことはできなかった。キレクは手に持ったネズミの頭蓋骨をためつすがめつし、パチパチと音を立てる暖炉の明かりの中で調べた。

次にキレクはジョッキを持ち上げ、アルダンのジョッキと打ち合わせた。

女店員がカウンターの上を布で拭いた。「で、どんな死に方だったんだい？」

「死んだとは言ってない」キレクは素早く振り向き、口に含んだエールを飲みこんでから手の甲で口元を拭った。「失踪したんだ」

女店員が舌打ちし、かぶりを振った。「そりゃあ難儀なことで。けど、ここいらで最近失踪したのはその男が初めてじゃないからね」

アルダンの声は手に持ったジョッキと同じぐらい震えていた。「キレク、そのネズミの頭蓋骨は普通じゃない。その大きさ…　間違いなく大発生した時のネズミだ。ネコみたいな大きさになるって聞いたことがある。それからそのルーン… ドルイドのものに似てる。ひょっとして――」

「落ち着けって」キレクはそわそわと周囲を見渡した。

女店員が幾ばくか真面目な調子で言った。「ドルイドのルーンって言ったかい？」

口を出すなと思いながら、キレクは不満げに言った。「ああ。それがどうかしたか？」

「たぶん与太話だけど、噂が流れててね。千匹のネズミの魂を持ってる化け物の噂さ」女店員はエプロンで手を拭きつつ身を乗り出し、男たちの注意をひきつつ話を続けた。「そいつは首から擦り切れた円盤を下げてて、円盤にはルーンが刻まれてる。命を奪う時にそいつを目印にするんだとさ。化け物は人々を下水にさらって、ネズミの群れと一緒にそいつの脳みそと目を喰うって話だ」

男たちはしばしの間黙り込み、キレクの冷笑が沈黙を破った。「馬鹿げてる。ホルプスはどうせ、カードの勝負で勝ってヤバい奴を怒らせたのさ」

鵜呑みにしたアルダンが言った。「何か… この世ならぬモノが下水にいると言うのか？」

女店員の目にかすかな感情が浮かんだ。「ただの噂に決まってる。お友達はすぐに見つかるわよ」

数時間が経った。

満月が空の低い位置に浮かび、わらぶき屋根と石畳の道に冷たく青い色合いを加えていた。この日でなければ美しい光景だと思えただろうが、今夜のキレクは不安に押しつぶされそうだった。千鳥足で家へと向かうキレクの頭の中は、下水に棲みついた化け物の話をする時の女店員の目の中に見たものでいっぱいだった。あの時、奇妙な戦慄が背筋に走り、その感触は今でも残っている。

通りから通りへとゆっくりと進んでいく中、キレクは行方知れずの友人のことだけを考えていた。路地から出ると、通りの前方でネズミが数匹群れているのに気付いた。

「ほらよ」一匹目を壁に蹴りつけると、断末魔の鳴き声とともに湿った、そして心地の良い鈍い音が響いた。二匹目は踏みつけにして、頭を石畳ですり潰してやった。ちっぽけな生き物を殺すたびに彼は倒錯した喜びを感じた。

通りの向こうにある、下水の暗い入り口がキレクの注意を引いた。開いた口のような入り口から見られているような気がしてならない。だが、何に見られているというのだろうか？そして目に映っている暗闇の中で緑色に光る点のような目は幻なのか、それとも実在するのだろうか？瞬きすると、目は消えた。

「害獣め、いなくなってくれて清々したぜ」キレクはろれつの回らない舌で言った。

しばらくして自宅に帰った彼は、妻の隣で心置きなく意識を手放した。



枕に頭を預ける前に最後に思い浮かんだのは、ホルプスとネズミの頭蓋骨、

そして緑色に光る点のような目のことだった。

数日が過ぎた。

キレクが近づいていくとアルダンの家の扉は開けっ放しになっており、数日前にアルデンとホルプスの家を訪れた際の様子をいやが応でも思い出させた。暗い家の中を進んでいくと、キレクは石造りの床を踏んだ靴が立てる粘着質の音にたじろいだ。得体が知れず、かと言ってろうそくに火をつけて疑問を晴らすのも何だか恐ろしかったが、家の奥へと進んでいくと、一歩進むたびに靴が黒い泥をまき散らしていることに気付いた。

それでもキレクは前進し続けた。アルダンと彼の妻はどこにいる？不安は募ったが、彼は暗闇の中で燭台を見つけ、ポケットに入っていた火口箱を使って火を灯した。ゆっくりと振り返り、部屋を調べ、そして立ち止まった。胆汁が喉までこみ上げてきた。

二人の人間がベッドに縛り付けられ、それぞれのあらゆる部位の皮膚と筋肉、そして組織が剥ぎ取られていた。アルダンとカサンドラだ。毛布は血と体液で濡れそぼっていたが、あまりに多すぎて吸いきれておらず、軟骨と血が床に滴り落ちていた。ベッドの遺体の間には、ルーンが刻まれた巨大なネズミの頭蓋骨が置かれていた。ホルプスの家で見つけたものとそっくり

最初、その男は人間というよりネズミの塊のように見えた。

だった。

キレクは嘔吐し、家を飛び出した。心臓が早鐘のように鳴り、胸を拳で叩かれているかのようだった。逃げなくてはならない。留まっていてはならない。家に帰らなくては。前日のホルプスの失踪と合わせ、キレクは最早、街に彼と家族の安全は存在しないことを悟っていた。

暗闇の中を急ぐも、背後から聞こえる何かを引きずる音が気になった。肩越しに後ろを一瞥すると誰も付いてきていなかったが、背中をじっと見られている感覚は消えなかった。息をする毎に、落ち着いてものを考えられなくなってくる。このまま家に帰るわけにはいかない。コレが家までついてきたら…

脳裏に焼き付いたアルダンとカサンドラのおぞましい姿を振り払いながら、キレクは通りを進む歩調を速めた。一体誰が、あんな恐ろしい方法でアルダンとその妻を殺したのだろうか？新しい領主の命令を受けて街の衛兵がやったとか？ひょっとすると、賢いが気まぐれな新しい主君が、蔓延するネズミの一掃に失敗したキレクたちに腹を立て、ついには排除を決めたのかもしれない。だが処刑するほどのことではないのではないだろうか？では、彼ではないとしたら誰だ？

あるいは、何が？

『千匹のネズミの魂を持ってる化け物の噂さ…』

キレクは下水の入り口に身を隠しながら、そもそも本当に追跡されていればの話ではあるが、追跡者をまいたと確信できるまでそこに留まっていようか考えを巡らせた。そして下水を通って家に帰るルートがあることを思い出した。彼は発作的に暗い水路へと姿を消し、ねばねばした壁を頼りに手探りで進んだ。

よろめきながらしばらくトンネルを進んだのち、開けた部屋で休憩を取った。ねじれた根が石造りの天井を突き抜けており、そうして出来たひび割れから幾筋かの青白い月光がさしこんでいた。木が多く生えている街の

「ネズミたちはどんな人間よりも俺に良くしてくれた」

公園の下にいるに違いなかった。

声を、ひょっとすると悲鳴をあげたとして、上にいる人々に聞こえるのかキレクは疑問に思った。前方には天井の紐からいくつか骨がぶら下がっており、ぶつかり合った骨が、不気味なウィンドチャイムのように乾いた音を立てた。部屋には様々な大きさの壺が散乱しており、幾つかには植物が、また別の幾つかには色々なキノコが生えていた。壁のひとつには古い馬車の車輪が立てかけられており、それを伝ってツタが這い上がっていた。隅には腐った動物の皮を積んだベッドが置かれており、その空間を濃厚な臭いで包み込んでいた。

部屋の中央には泡立つ鍋があり、液体の表面には小さな動物の頭蓋骨が浮かんでいた。

戻る道を探しながら向きを変えると、菜園から突き出している人間の髑髏と粗削りな壁に生えている大量のキノコが目に入り、鼓動が激しくなった。そして低い笑い声が地鳴りのように響き、彼は部屋の反対側へと注意を向けた。

、その男は人間というよりネズミの塊のように見えた。だがやがて、この外套を羽織った存在は毛皮を何重にも着こみ、顔をフードとマスクで覆っているだけで、確かに人間であることがわかった。男は布の切れ端と糸で結んだ骨、いや頭蓋骨を、首の周り、腰、そして靴に付けていた。肩幅が広いが、片方の肩にかけているのはネズミの死体だろうか？

「すまない。迷い込んでしまったもので、すぐ出ていく」キレクはどうにか言葉を絞り出した。

男は再び笑い声をあげるとフードをマスクを取り、タトゥーの入った禿頭を露わにした。だが、どうも彼に見覚えがある。鋭い歯が生えた男の口が笑みを形作った。

いつか見た顔が脳裏をよぎり、キレクは男があの少年であることを悟った。キレクは咳払いした。「あなたは…　領主様が引き取り、後見役を務め

飢えた千の口と囁き声の命令により、彼に死が訪れようとしていた。

られた少年か。まさか… ご存命とは。ヴィルム様なのでしょう？」

「昔はそうだった」巨大な黒いネズミが肩に止まると、彼の言葉は奇妙な含み笑いへと変わった。ヴィルムの口元をネズミが嗅ぎまわる様は、まるで彼に口づけをしているかのように見えた。「だが今は、それ以上の存在になった」

キレクは、腹の奥に冷たいものを感じた。ヴィルムが、かつて自分を付けまわしていた頃と同じ人物か自信が持てない。全身が逃げろと叫んでいた。

『千匹のネズミの魂を持ってる化け物の噂さ…』

キレクは身動き一つできなかった。「どうして日のあたる場所ではなく、ここに住んでいるんです？砦には――」

「砦は大地に広がる病害だ」ヴィルムの声は氷のようだった。「この街は森を切り開いて農地に変え、ごみで大地を汚している。煙で空気に毒をばらまき、汚物で川を窒息させている。だから今度は俺の友が、人間に盗まれた大地を取り戻すのだ」

キレックはかぶりを振った。理解できない。男の注意をそらす手段を考える必要があった。ヴィルムの肌の不明瞭な夕トゥーを身振りで示して言った。「その印ですが、お父上がご存命の時はなかったものですね。一体… どんな意味が？」

「俺がどう下水で育ったかを記してある。自分で彫ったんだ」彼がニヤリと笑った。肩に垂れ下がっているネズミの長い尻を撫で、頭上のネズミの頭蓋骨を軽く叩いた。「こいつらは俺の家族だ。見つけた時は死んでたが、こうして偉大なる庇護者のもとに戻ってこれたわけだ。それからこんなのもある…」

彼が腰にぶら下げている長く尖った骨に手をやった。「こいつは戦利品みたいなもんでな。獲物を殺す度に一本いただいてるんだ。まだ数本しかないが、これからたくさん手に入れるつもりだ。今は四本だな。見てみるかい？」彼が一本の骨を持ち上げて言った。「こいつなんか、あんたをア

ナタって呼んでたな」

「俺の…　妻なのか。貴様――」悲しみでキレクの体が動くようになった。世界が回るような感覚があり、その重さに彼は崩れ落ち、膝をついた。妻が死んだ。おそらくはアルダンの時とほとんど変わらぬやり方で殺された。

「ドルイド、確かに私はお前に酷い扱いをしていた」考えるよりも早く、言葉が口をついて出てくるのを感じた。「すまなかったと思う。だが私を殺すほどの――」

「裁くのは俺だ。そしてネズミたちが陪審と処刑役を務める」泣いている男に一歩近づきつつ、ヴィルムが唇を引き結び、怒りに燃える目を細めた。「お前は俺を見殺しにした」

「謝っただろう！許してくれ！」

ヴィルムが舌打ちした。「ネズミたちはどんな人間よりも俺に良くしてくれた。お前に火の中に投げ込まれたあと、ネズミたちが俺を助け、死体の山から引きずりだしてくれたんだ。何年もの間、こいつらは俺の目となり耳となってくれ、代わりに俺はこいつらを守ってきた。こいつらは、俺の唯一の家族だ。これまでもずっと俺の唯一の家族だったんだ」男がかぶりを振った。「疫病が危険だったことなど一度もない。人間こそが危険だった」

キレクは立ち上がろうとしたが、体が言うことを聞かなかった。ただ妻や同僚たちのことと、皆が死ぬまでにどれだけの責め苦を受けたのか考えることしかできなかった。不要な苦しみだ。熱い涙が顔を伝った。「お願いだ！この通りだ、ドルイド。解放してくれ！それが無理なら、せめて速やかに殺してほしい」

「質問に答えろ」ヴィルムがキレクと目を合わせた。「まだお前の惨めな生にしがみつく気なのか？」

キレクは悲嘆にくれた泣き声をあげた。

ヴィルムが首の周りに下げていた何かに触れた。タリスマンだろうか？ヴィルムの唇が動いたが、キレクが耳にした囁きは違う者たちの声だった。語りかけてくる千の声はキレクには理解できない言語だったが、死に至らしめるための言葉であることは明確にわかった。

タリスマンではない。そう、これは目印だ。

ありとあらゆる裂け目からネズミが殺到して床を覆いつくし、キレクを

包み、死に至る抱擁を与えた。キーキーという耳をつんざく鳴き声と、延々と続く爪が石材をこする音、水たまりや湿った場所を通る際の水音しか聞こえなくなる。

ヴィルムがキレクの髪を掴んでネズミの山の中を引きずり、壁に向かって強かに投げつけた。そしてネズミに向かって奇妙な言葉を発した。命令だったのかもしれない。ネズミたちはすると、背中にキレクを乗せ、部屋からあふれ出て下水の出入り口へと向かった。

出入り口の上には、街で最後の野焼き場があった。キレクと同僚たちが街のネズミたちを処分するのに使ったのも、この野焼き場だった。ネズミたちは、悲鳴をあげ身をよじるキレクをここで解放した。ヴィルムが解放された貴族を掴むと、驚くべき力で野焼き場へと放り投げた。

「やめてくれ！」キレクは甲高い悲鳴をあげた。手を伸ばしても、ヴィルムが首から下げているルーンが刻まれた骨の一つを掴むことしかできなかった。火に飲み込まれると皮膚に激痛が走った。体を酷く打ちのめされたせいで、肉が焼かれ炭化しかけているのに抵抗できない。

飢えた千の口と囁き声の命令により、彼に死が訪れようとしていた。

私、テジャルはこの幻視を見届け、生涯忘れることはない。それこそ私の責務。それこそ私の才。そしてこのような伝説の人物の言葉を耳あるものに伝えることこそ私の務め。

最早ネズミが大地に疫病をまくことはなく、最早ドルイドの呪いや闇に潜む化け物の噂も流れていない。人々は安息を手に入れたのだ。

だがもしあの街を訪れるのであれば、気が付くと夜に通りを歩いている時に気付くと肩越しに後ろを一瞥し、片隅の物陰に目を凝らしているかもしれない。何となれば、染みついた血を完全に拭い去ることはできないのだ。

ヴィルムはこの物語の英雄ではなかったが、悪役でもなかった。彼の本質は、世界に魂を踏みにじられ、経験した苦痛を、その原因となったものに与えんとするただの少年だった。キレクについても同じこと。彼の苦難は自らが招いたものだった。世界を形作るのは英雄と悪役ではなく、むしろ人々と苦痛と喪失が織りなす。重要なのは人々が苦痛にどう立ち向か

い、喪失から立ち直るかだ。英雄であれ悪役であれ、それこそが伝説の人物の資質を我々に伝えてくれる。

願わくば、この物語の炎が侵入者を焼き払い、大地から奪われしものが取り返されんことを…



Z BREWER 氏はニューヨークタイムズのベストセラー作家で、現在までに「Chronicles of Vladimir Tod」シリーズのほか八冊の作品を出版しています。同氏はこれまでに思い出せないほどの短編小説を執筆しており、Poorly Timed Gamesにおいてナラティブ・リードとしてゲーム開発者として勤務した経験があります。その英語での代名詞には、ジェンダーニュートラルな表現が使われています。魅力的なキャラクターの死を語り読者を泣かせていない時は、いじめ対策とメンタルヘルスに関する活動を行っています。また、ヘアスタイルには定評があります。同氏は現在ミズーリ州のセントルイスに、夫と子ども、それから一部の人が「猫」と称する三匹のふわふわの君主と一緒に住んでいます。代表作は吸血鬼ものですが、本人は吸血鬼ではありません。



テジャルには語るべき物語が多く存在します。今後もヘダジの短編小説が続々と公開予定です…